



ミュンヘン便り ～春は旅立ち～

新緑の緑がみずみずしい季節でしょうか。今年のミュンヘンは、歴史的な暖冬の後、そのまま春になってしまい、例年よりも季節が一月早まっています。そのため、4月頭には、桜、りんご、レンギョウ、木蓮など花々が一斉に満開となり、同時に新緑が芽吹き、ホワイトアスパラガスも出回り始め、一気に春爛漫となりました。何しろ今年の冬は、12月後半からずっと、気温がほぼ0度以上で零下になることが無かったうえ、雪も全く降らず、3月の最後の週に、冬の悪あがきであるかのように雪がひらひら待った日が1、2日あっただけでした。通常であれば、春の最初は路上に積もった雪が溶け始め、路面がどろどろになって歩くのに苦労するのですが、今年の冬も春も路面は乾きっぱなし。いかなる天候でも自転車通勤を貫く同僚のHは、雪も雨も全くなかった今年の冬、毎日快適に通勤できて喜んでいたのでした。

4月の最初の土曜日、私は元同僚の弁理士Kとハイキングに出かけました。通常であれば、4月頭は1000m以下の低い山でもまだ雪が残っていたり、雪解け中で道がドロドロだ



ったりするのですが、今年は例外。既に道はからからで、アルム（Alm）と呼ばれる山を切り開いた牧草地には春の山の花が満開でした（花の写真2枚）。この元同僚K、ついその前の週には、イタリア山岳地帯での自転車ツアーに参加し、7日間で標高差合計10000mの山道を完走したとのこと。自転車ツアーで鍛えた持久力で山道もグングン登ります。

登りながら、話は元同僚Kの事務所の若手達の話になりました。若手達は、かつて私がその事務所で修行していた時代、弁理士資格をとるべく修行していた同僚たちです。今その同僚たちも弁理士資格を取ったところです。「Mr. Bは、ストラスブルグの事務所に勤めることになったんだよ。」Mr. Bは、ドイツ人のお父様とフランス人のお母様を持ち、ドイツ語及びフランス語を母国語とします。英語もちろん堪能です。私がまだ一緒に働いていた時代のある日、我々はEPC（欧州特許条約）の条文で英語では意味不明な部分の条文について考えていました。EPCは、英仏独の3ヶ国語で書かれていますので、Mr. Bは、フランス語表記とドイツ語表記と



をみて、「うーん、この条文、英語とドイツ語及びフランス語とでは意味がちょっと違うなあ。英語だと不明確だけど、ドイツ語やフランス語だったら意味がはっきりしてるよ。」と言います。多言語に長けているのは、有力かつ強力な武器ですね。

さらに別のある日、Mr. Bと私とは、欧州弁理士試験について立ち話をしていました。そのとき、彼はこういったのです。「僕、試験を何語で書こうか、迷ってるんだ。」つまり、彼としては、ドイツ語で書くか、フランス語で書くか、どっちがいいか迷っているというのです。私としては英語で書くのにも四苦八苦するというのに、何と贅沢な悩み！！もちろん本人にそう言いました。本人、嬉しそうにニコニコしていました。ドイツ語とフランス語とを自由に操るMr. Bが、今はフランス領であるものの昔はドイツ領にも属していたことがあり、フランス文化とドイツ文化とが交錯するストラスブルグを働く場所として選んだというのは、よく理解できます。

ちなみに、ストラスブルグは、フランスのアルザス地方にあり、その辺りではドイツとフランスとの国境となっているライン川沿いに位置しています。ストラスブルグから見てライン川の向こう側は、もうドイツ領です。アルザス地方及びロレーヌ地方がドイツ領になったりフランス領になったり、両国の間で行ったり来たりした歴史はよく知られていますね。小説「最後の授業」でその歴史の一端を感じられた方も多いと思います。添付の川の写真は、ミュンヘン・パリ間直通の高速鉄道TGVの中から撮った、ライン川とストラスブルグです。ミュンヘン・ストラスブルグの間の3時間はSchwarzwald（黒い森）と呼ばれる山岳地帯を走るため、路線にカーブが多くスピードが出ないのですが、ライン川を渡ってストラスブルグに着いた後、TGVは一気に速度を上げ、パリまでノンストップで3時間、大平原をほぼ直線上に突っ走ります。



Mr. Bは、半分フランス人らしく食通で、美味しい店をよく知っていました。また、ドイツではあまり知られていないフランス食材を、我々同僚に教えてくれたりもしました。私のアパートの引っ越しに際しては、洗面所の戸棚を壁につけてくれたり、一緒にイケアに行ってくれたりしました。電気を天井につけたときには、全く役に立たない穴を3つ天井に開けたり、電気をひとつ壊したりしたものの、最終的には何とか2つの電気を天井につけてくれました。彼がストラスブルグに行くというのを聞いた時、彼の文化・言語的利点を活かして活躍できる良い選択だと思い納得しつつ、彼がミュンヘンからいなくなるのは少し寂しい気もし、春はドイツでも新しい旅立ちの時だなあと自分に言い聞かせました。

筆者紹介

稲積 朋子（いなづみ ともこ）

1994年弁理士試験合格。2012年ヨーロッパ弁理士試験合格。現在、GIP Europe Patentanwaltskanzlei所属。1997年、新樹グローバル・アイビー特許業務法人入所し、主に国内外の出願及び権利化業務を担当。2007年11月より、ミュンヘンの現地提携事務所に駐在。2009年1月、GIP Europe（GIPグループミュンヘンオフィス）設立。日本企業からのヨーロッパ出願・中間処理・異議申立・侵害品ウォッチングや、ヨーロッパ企業からの日本出願・中間処理業務を行う。趣味は、山登り、ほーっとすること、寝ること、健康づくりに励むこと。